

国語

第一問 左は、中畑正志『アリストテレスの哲学』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

本書で「魂」と訳されるのは、「プシューケー」(psychē)というギリシア語である。現在では、たとえば英語の「心理学」psychology「精神分析」psychoanalysisなどの言葉の一部分となっていて、「心」「精神」の意味で使われている。

この古代ギリシア語は、そうした「精神的な」意味にかぎらず、もっと広い意味で使用されていた。最古の用例を見出せるのは叙事詩作家ホメロスの作『イリアス』であるが、そこでは死とともに人の肢体から去っていく霊とか、冥界に彷徨う人の影のような亡霊的存在を意味している。こうした用例では、人間の心のはたらきや精神状態との直接的なかわりは見出されない。

A

それゆえ古代ギリシアでは、魂は、植物にも人間以外の動物にも宿ると考えられていた（ストア派のように植物には魂を認めないという例外的な立場もあるけれども、それはこの論者たちの一つの哲学的な見解である）。アリストテレスの自然学的知の構想のなかに、動植物についての考察に先だって、『魂について』および感覚や記憶、夢などについて論じた『自然学小論集』が含まれると考えられるのも、このためである。事実彼は、『魂について』の冒頭で、「魂を知るということは、真理の全体にとつても貢献するところは大きいが、とりわけ自然の研究に対して資するところは最大であると思われる。なぜなら、魂は生物（動物）の始原（原理）に相当するものだからである」（『魂について』第一卷第一章）と宣言している。

生命活動全体を蔽う魂の概念が、心の概念と異なることは明らかだろう。それでも、アリストテレスの魂をめぐる考察が心をめぐる議論でも参照されるのは、動物の一員である人間の魂の活動に、感覚知覚や思考といった、こんにちで言う心的現象が含

まれるからにはかならない。

アリストテレスは魂の探究に際しても、その考察の手續きについて意識的で、『魂について』の冒頭でこれを詳しく論じている。実際の考察は、まず全体的な定義を与えたうえで、さらにより立ち入った定義を与えるというかたちで進む。

「最も共通的」とされる最初の規定によれば、魂は自然的な物体（身体）の形相^{けいそう ぎょう}、あるいは自然的物体の第一次の終極実現状態（エンテレケイア）として規定される。魂がノコギリの切断機能にたとえられていることが示すように、魂は自然的な物体（身体）のもつ本質的な機能ないし能力である。そして魂と身体とは、蠟^{ろう}とそこに押された形の関係にたとえられ、素材と形相の関係にある。したがって、両者が相関関係にあることから「魂と身体が一つであるかどうかを探究する必要がない」（『魂について』第二卷第一章）のである。

身体に実現するはたらきの一つという魂のとらえ方は、デカルト的な精神と物体の二元論に対比されて、二〇世紀以降には心身一元論の主張として（好意的に）解釈されてきた。さらに踏み込んで、アリストテレスは心身一元論のうちの特定の理論、たとえば機能主義の先駆者と評価されたりもした。機能主義とは、心がある特定の状態にあることを、身体ないし物体の因果的な機能（ファンクション）として理解する立場である。たとえば、ある感覚刺激という入力に対して、特定の行動という出力を導く一種の関数（ファンクション）として心の状態を考えるのだ。ノコギリとその機能の関係が身体と魂との関係と類比的であるというアリストテレスの議論は、この機能主義的な解釈に一定の支持を与えるようにみえる——もしも、魂のはたらきが心のはたらきとして考えられるとすれば。

だが、このようにアリストテレスの見解を現代的な心の理論と重ねることには、大きな困難がある。心と身体（物体）の両方の概念について、アリストテレスとわれわれとの間には、より基本的な見解の相違があるからだ。そしてこの点が、近代以後の心の概念を前提とした諸理論の枠内には収まらない、アリストテレスの魂論の最大の特質でもある。

アリストテレスは、以上の一般的で共通的な魂の規定からさらに分析を進め、彼が「魂の最も本来固有の説明規定（定義）」と呼ぶもう一つの規定を提出している。それは、魂とは、栄養摂取、運動、感覚知覚、思考というそれぞれの能力であるという規定である。この定義を支えるのは、魂が生きていることの原理であり、しかし植物と動物、そして人間とではその「生き方」が異なるという^⑦ドウ察である。植物は栄養を摂取して生きるが、動物は運動と感覚知覚をおこない、人間は思考することができる。たとえば休むことに似た「下手な考え」であっても、人間は多くの時間を思考をめぐらして生きているのだ。このように、それぞれの生の形式は異なる。

われわれは、生きるということを、生命の維持、つまりアリストテレスの言う栄養摂取のはたらきとしてまず考えるであろう。じつさいのところ、感覚したり考えたりすることも、^①新陳代謝活動がなければ不可能である。したがって、こうした魂の諸能力は、一つの能力を基礎として次の能力が成立するという、ある C 的な構造をもっている。まず植物をはじめとしてすべての生物は、栄養となるものを摂取することによって生き延びることができるので、栄養摂取能力は最も基層にある能力であり、すべての魂をもつもの（生物）にそなわる。植物にはこの能力が帰されるだけだが、動物においては他の諸能力がこの能力を基礎として成立し、それらの諸能力の間にも C 関係が成立する。さらに、人間の生きるという営みには思考する活動が含まれるので、その魂には思考能力が含まれるが、同時にこの能力の基礎となる栄養摂取、感覚知覚、運動の各能力もそなわっている。

しかし、同時に次のことも確認しなければならない。アリストテレスにとって、栄養摂取だけでなく、運動、感覚知覚、そして思考も、それぞれが生る形式であり、生きる能力の発現のかたちなのだ。アリストテレスは、栄養摂取や新陳代謝の活動だけを「生きる」ことのかたちだと限定していない。むしろ、生のこうした理解の仕方から脱却することを求めているとも言える。彼は知性、感覚知覚、場所的運動、そして栄養摂取のうちの「どれか一つがそなわっているとすれば、それだけでわれわれはそれを「生きている」と語る」と主張する（『魂について』第二卷第二章）。感覚知覚や抽象的な思考も、生きることに余剰的に加えられる活動ではなく、生きることの一つの形式である。走ることや痛みを感じることはもちろん、碁の次の手を考えることも、

どのように生きるべきか悩むことさえも、「生きる」あるいは「生きている」ことをそれぞれの仕方で表現しているのだ。

われわれは、しかし、もはやこうした魂の概念を通して世界を見ていない。われわれはそれにかわって心という概念をもち、それによって世界を切り分けている。栄養摂取は身体の活動であり、思考は心のはたらきである、というように。

われわれがアリストテレス的な魂の概念を理解するためには、失われた思考の方向感覚を覚醒させなければならない。その

D 1

となるのは、

D 2

という仕切りによってその外と内に分けられた

D 3

と

D 4

を、同

じ概念の傘の下に入れて同じように考えることができるかどうかである。あなたは、朝、パンを頬張りながら、携帯の天気予報を確認しているかもしれない。この二つの活動、つまり栄養を取ることと携帯を見ることを、

D 5

の活動として同様

に考えるのだ。——そう考えることが、アリストテレスのような仕方で考えることである。そのためには、
D 2 のは
たらきについての一般的な見方を大きく変更しなければならない。

第一に、栄養摂取も感覚知覚も、たんなる物理的過程ではない。感覚知覚が栄養摂取と並行的であることは、感覚知覚を、身体Ⅱ物体のプロセスないし物理的に記述される出来事として理解することではない。そもそも栄養摂取という活動もまた、物体内のたんなる因果的過程ではなく、生きることのひとつのかたちとしての意味や役割をもっている。たとえば、食物という対象も、そして食べるという行為も、摂取・消化し人間の成長や健康、生存を担うという連関のなかではじめて成立する。

アリストテレスの哲学を現在に蘇^{よみがえ}らせている哲学者の一人であるマイケル・トンブソンの奇妙なサメの例はこのことを物語る。多くのサメとは異なり、想像上のある特異なサメは、小魚などではなく、水中のプランクトンによって栄養を摂取するので、このサメは海水を濾^ろ過^かしプランクトンを取り出す身体のしくみをそなえている。他方でこのサメも、他のサメと同じように、小魚を追いかけ、口から体内に取り入れるが、その小魚はぐちゃぐちゃの混合物になって、他の捕食動物が寄ってきたときにそれを追い払うために吐き出されるのである。このサメが小魚を追いかけて飲み込む行動は、他のサメが何かを「食べる」場合の動きによく似ている。近づく、口を開ける、嚙^かむという動作自体は、同じと言ってよい。しかしそれは「食べる」ことではない。飲み

込んだものが、消化され血中に取り入れられたり、身体の一部になったりしていないからである。これに対して、「食べる」という行為は、たんなる物理的で因果的なプロセスではない。それは、栄養摂取という、有機体全体の生き方の一部となりそれに貢献する活動という意味をもつことによって、はじめて行為として特定され理解される。感覚知覚もまた、動物や人間の生き方の一部となりそれに貢献する活動として特定され理解されるのである。

^E 栄養摂取も感覚知覚も、このような意味で、生きるための活動であり、生きることの表現である。とすれば、その営みにとって主体の置かれた環境ないし外的な世界との適切な関係は本質的である。栄養摂取においては、そのことは明白だ。それは生物がその環境に存在する自身の生存に役立つものを、摂取し消化し血肉化するという仕方で受容する活動である。感覚知覚も、これと並行的に考えられる。すなわち感覚知覚は、動物が周囲の世界が提供する知覚情報を、認知するというかたちで受容する活動である。

アリストテレスが「魂の部分」と呼ばれる栄養摂取や運動、感覚知覚などの能力の考察を、その能力のかかわる対象——これを表わす言葉「アンティケイメノン」の原義は「(何かに) 対して措定あてたいされているもの」つまり「相対するもの」であり、能力との相関性を含んだ表現である——から始めるのも、こうした事情を反エイウしている。魂のはたらきは、生きるために必要な外的対象を、それぞれの対象のあり方にふさわしい仕方で適切に受容するという能力だからである。したがってアリストテレスは、魂の各能力の分析を、まずその〈対象〉であるもの（栄養摂取なら食べ物、感覚知覚なら色や音など）を規定することから始める。

その〈対象〉は、ある力（デュナミス）をもつ存在である。栄養摂取される食物は、体内に取り込まれて、生物を生存させ保持させる力をそなえている。視覚の場合であれば、視覚に固有の対象とされる色の本性は光を変化させることができることにあ
る（『魂について』第二巻第七章）。それぞれの〈対象〉は、媒体を通じて、感覚する主体の感覚能力に作用し、その認知活動を引き起こす力をそなえている（それゆえ感覚の対象となるものは、「感覚され、[、]るもの」という意味の言葉で表わされている）。

これに対応して、その〈対象〉を受けとるそれぞれの魂もまた独自の力をもつ。栄養摂取能力は、飲食などを通じて、栄養物を摂取し生きるために役立てる能力であり、視覚は視覚対象が提供する光のなかの情報を対象の認知というかたちで受容できる能力である。

こうして実在する対象の能動的な力と魂の受動的な力が共同することによって、それぞれの力が発現され、ある特定の活動——アリストテレスが「エネルギー」と呼ぶもの——が実現する。アリストテレスによれば、こうして複数の力の共同によって諸事象が成立することが、魂の活動だけでなく、世界の最も基本的なあり方である。われわれが生きているのは、多種多様な力に溢れ、また相互に共同することによってそれぞれの力を発現している世界である。

このような魂の概念は、しかし、あるときに放棄され、それにかわって心の概念が受け入れられるようになった。そのため、われわれはいま、魂の概念を使つてものごとを考えることはない。はたして反故にされた概念にあらためて注目することに意義はあるのだろうか。

このことを考えるためには、この交代の① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆

た想念に疑いを向けて検討していくが、その主要なターゲットになったのは、栄養摂取、歩行（運動）、感覚そして思考の各能力から構成される魂の概念、つまりアリストテレスによる魂の第二の規定を源泉とした概念だった。デカルトに従えば、魂に属するとされた機能のうち、「栄養摂取」や「運動」、また「感覚」などは身体を伴い、疑うことができるので〈私〉から切り離すことができる。しかし残る「思考する」は〈私〉とは不可分で疑いえない。〈私〉とは「思考するもの」(res cogitans)であり、この思考するものが心ないしは精神 (mens) なのである。こうして、従来の魂の概念を引き裂くことから、思考するものとしての精神と延長するものとしての物体という実在的な区別が導かれる。精神^Gと物体という二つの実体から構成される世界には、「栄養摂取し、運動し、感覚し、思考する」機能がすべて帰属するような「魂」の居場所は残されていなかった。近代の「心」「精神」の概念の原型は、アリストテレス以来の魂の概念から解放されて、ここに成立したのである。

〔注〕

1 ストア派——アリストテレス（前三八四年～前三二二年）よりのちのゼノン（前三三五年頃～前二六三年頃）に始まる哲学の学派。理性によって感情を制し、確固たる自己の確立を目指したため、禁欲主義と評される。

2 形相——形相（エイドス）とは、あるものをそのものたらしめる固有の性質を指す。また素材（ヒューレ）とは、あるものをつくるための材料を指す。ノコギリの形相は切断するという機能にあり、その機能の実現に適した鉄や木が素材ということになる。

3 コギト——ラテン語コギト (cogito) は cogitare（考える）の直説法一人称単数現在形。コギト・スムのスム (sum) は、英語における be に相当する存在を表す動詞 esse の直説法一人称単数現在形である。

問1

空欄Aの段落には次の四つの文が入る。その順番として、最も適切なものを次から選べ。

1

a 「魂」と訳されるこの言葉は、生きることの源、あるいは生の原理という意味をその芯にもっていた。

b それでも、この語は使用のなかに、濃淡の差はあれ、「いのち」あるいは「生きること」と何らかのかかわりを保持し続けていた。

c その後この言葉は、徐々にその意味を拡大し、こんにちの分類では認識や感情、欲求などはたらきもその手中に収め、われわれの言うところの「心」のはたらきとのかかわりを強めていく。

d そのため、この言葉から派生した形容詞「エンプシュコン」は、「魂をもつ」ことを意味するが、その最初期の用例からほぼ「生きている」という意味で使用されている。

① a ↓ b ↓ d ↓ c

② a ↓ d ↓ c ↓ b

③ c ↓ b ↓ d ↓ a

④ c ↓ d ↓ a ↓ b

⑤ d ↓ a ↓ c ↓ b

問2 傍線部Bについて、「アリストテレスの見解を現代的な心の理論と重ねる」とはどういうことか。最も適切なものを次から選べ。

2

① 身体をノコギリ、魂をその切断機能と捉えるアリストテレスの見解を、現代的な精神と物体の二元論として理解すること

② 魂をノコギリ、身体をその切断機能と捉えるアリストテレスの見解を、心身一元論の主張として好意的に解釈すること
③ 魂と身体が一つであるかどうかを探究するアリストテレスの姿勢を、心身一元論のうちの機能主義の立場を先取りするものとして積極的に評価すること

④ 魂と身体を相関的に捉えるアリストテレスの見解を、ある感覚刺激という入力に対して、特定の行動という出力を導く一種の関数として心の状態を考える立場であると解釈すること

⑤ 魂と身体を二元論的に捉えるアリストテレスの見解を、心のある特定の状態が身体ないし物体の因果的な機能であると理解する立場として評価すること

問3 空欄Cに入る言葉と、植物、動物、人間のうち動物の魂が有する能力の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

3

Cに入る言葉 動物の魂が有する能力

- | | | | |
|---|----|--|-------------------------|
| ① | 循環 | | 感覚知覚能力、運動能力 |
| ② | 循環 | | 感覚知覚能力、運動能力、思考能力 |
| ③ | 循環 | | 栄養摂取能力、感覚知覚能力、運動能力、思考能力 |
| ④ | 階層 | | 感覚知覚能力、運動能力 |
| ⑤ | 階層 | | 栄養摂取能力、感覚知覚能力、運動能力 |

問4 空欄D1からD5に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

4

D 1 D 2 D 3 D 4 D 5

- ① 試金石 | 心 | 感覚知覚 | 思考 | 魂
- ② 試金石 | 魂 | 栄養摂取 | 思考 | 心
- ③ 試金石 | 心 | 栄養摂取 | 感覚知覚 | 魂
- ④ 集大成 | 魂 | 感覚知覚 | 栄養摂取 | 心
- ⑤ 集大成 | 心 | 思考 | 感覚知覚 | 魂

問5 傍線部Eに関する説明として、最も適切なものを次から選べ。

5

- ① 栄養摂取と感覚知覚は、物理的過程ではなく因果的過程として捉えるべきものであり、有機体全体の生き方の一部として特定され理解されるということ
- ② 栄養摂取は物体内のたんなる因果的過程であるのに対し、感覚知覚には生きることの一つのかたちとしての意味や役割がそなわっているということ
- ③ 栄養摂取と感覚知覚は、外界の食物や情報を取り込むという意味において物理的、因果的過程であり、その過程そのものが生きることの表現でもあるということ
- ④ 栄養摂取は口を開け、嚙むという動作において成立するものであり、それは何かが皮膚に触れることで感覚知覚が成立することと同じ物理的過程であるということ
- ⑤ 栄養摂取と感覚知覚は、たんなる因果的過程ではなく、生き物全体の生き方の一部となり、その生き方に貢献する意味や役割をもつということ

問 6 傍線部 F について、それはどのような世界か。最も適切なものを次から選べ。

6

- ① 人間の魂の積極的なはたらきかけによって、実在する多様な対象の潜在的な力が解放される世界
- ② 実在する対象の感覚主体に作用する力と、その作用を受容する魂の力が多様な結びつきを織り成す世界
- ③ 多様な生命の魂が共同することを通じて、実在する静的な対象に動的な力を与える世界
- ④ 対象の受動的な力と魂の能動的な力が相互に共同することで、それぞれの力を発現している世界
- ⑤ 対象の能動的な力と魂の受動的な力が連携することなく、互いの領域においてその独自性を多様に発揮している世界

問 7 傍線部 G に関する説明として、最も適切なものを次から選べ。

7

- ① デカルトは、栄養摂取を身体に帰属させ、それ以外の魂の機能を心、精神に帰属させることで、アリストテレスによる魂の概念を分断し、その居場所を奪ってしまったということ
- ② デカルトは、栄養摂取と運動は身体を伴い、感覚と思考の能力だけが疑いえないと見なして、それを担う心、精神の概念によって魂の概念の居場所を奪ってしまったということ
- ③ デカルトは、従来の魂の概念を引き裂いて、思考するものとしての精神と延長するものとしての物体という区別を導くことで、確実なる〈私〉を探究したアリストテレスの学問的遺志を受け継いだということ
- ④ デカルトは、身体を伴う栄養摂取、運動、感覚の各能力を、疑いえない、思考するものとしての〈私〉から切り離して、生きることの原理であった魂の居場所を奪ってしまったということ
- ⑤ デカルトは、従来の魂の概念を引き裂いて、思考するものとしての精神と延長するものとしての物体という区別を導くことで、魂の概念をアリストテレス以来の伝統から解放し、再生させたということ

問 8 本文の内容と合致するものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

8

① アリストテレスによる魂の第二の規定は、魂を身体に実現するはたらきの一つとして捉えた点において、心身一元論のうちの機能主義の立場を先取りするものであった

② アリストテレスにとって、栄養摂取は生命を持続するための最も重要な能力であり、感覚知覚や抽象的な思考は生きることに添えられる残りものとしての地位しか与えられなかった

③ 植物、動物、人間の生き方はそれぞれ異なることから、魂とは栄養摂取、運動、感覚知覚、思考のそれぞれの能力であるとしたのが魂の第一の規定であり、アリストテレスの魂に関する見解の基底を成すものである

④ デカルトによる心の概念の導入によって、アリストテレスによる魂の概念が有していた心身二元論の思想が上書きされ、その後の歴史において反故にされてきた

⑤ アリストテレスが魂の有する能力に関する考察をその関与する対象から始めたことは、世界を構成する対象をそのあり方にふさわしい仕方を受容するという、魂の力を受動的なものと捉える彼の見方に由来する

問9 文中の二重傍線部⑦から⑩のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを次から選べ。

9 ア ドウ察

① 付和雷ドウ

④ 学ドウ保育

② ドウ窟探検

⑤ ドウ理をわきまえる

③ 引ドウを渡す

10 イ 新陳代シャ

① 面会シャ絶

④ 交通をシャ断する

② シャ陽産業

⑤ 不必要な部分をシャ象する

③ 疑いが晴れてシャ免される

11 ウ 反エイ

① エイ華を極める

④ エイ意執筆中の論文

② 前エイ的な作風

⑤ 初監督作品を上エイする

③ 山中で野エイする

12 エ ケイ緯

① 税制上の恩ケイを受ける

④ ケイ薄な言動を慎む

② 円の直ケイ

⑤ 人生を変えるケイ機となる

③ ケイ口薬を処方する

13 オ ヘン歴

① 悪しきヘン見を捨てる

④ 何のヘン哲もない石

② 雑誌のヘン集に携わる

⑤ 生物の死は普ヘン的な事実である

③ 紙ヘンを握りしめる

第二問 左は、磯野真穂『他者と生きる』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

昭和から平成に年号が変わってすぐの平成3年、自分らしさの大切さを高らかに歌い上げた槇原敬之の「どんなときも。」（1991年）がミリオンセラーを達成した。21世紀に入ると、SMAPが歌う「世界に一つだけの花」（2003年）が初登場から2週目でミリオンセラー、21週目にはダブルミリオンを達成し、押しも押されぬ平成の大ヒット曲となった。

高齢化社会への展望を記した平成28年版『厚生労働白書』（2016年）では、「自分らしく」老いること、「自分らしく」活躍すること、たとえ認知症になっても「自分らしく」暮らして最期を迎えることなど、自分らしくあることの大切さが17回も繰り返される。「自分らしさ」は^Aどうやら行政用語の地位すら獲得したようだ。

若かろうとそうでなかろうと、健康であろうとなかろうと、誰もが「自分らしく」あること。皆が「自分らしく」「共に」生きていくこと。これこそが、皆が幸せな社会を実現するための鍵である。平成とは、「自分らしさ」に救いを求めた時代であった。

1.0 平成と「自分らしさ」の増殖

平成が「自分らしさ」の時代であったことは、新聞記事が^⑦タンの的に示している。読売新聞のデータベースである「ヨミダス歴史館」、朝日新聞のオンライン記事データベースである「聞蔵Ⅱ」を用い、80年代から10年ごとに分け「自分らしさ」「自分らしい」「自分らしく」が見出し及び本文に現れる記事の検索をかけた。すると80年代にはわずか53回の登場であった「自分らしさ」に関する3つの言葉の利用が、平成の始まる90年代になると約45倍の2374回、2000年代になると約135倍の7175回という爆発的な伸びを見せる。「どんなときも。」と「世界に一つだけの花」はこの増殖に先駆けた、あるいは火をつけた2曲であり、その意味でまさに平成を象徴しているのである。

① また^①チュウ出された記事からわかるのは、「自分らしさ」が思春期、老い、病気・障害、ジェンダー、スポーツ、ファッション

ンなど、ありとあらゆる人生の局面に登場することである。入試への向き合い方、対人関係の悩み、ジェンダーにまつわる事柄の難しさ、どんな服を着たらいいか、どんなジュエリーを身につけるか、大一番の試合に向けた身構え、病気や障害になった時の苦しみ、死に際する選択の迷いなど、人生で起こる多様な悩みや困難は、その渦中にある人が「自分らしく」あること、あるいは周りの人間がそれを引き出すことで解決するとされるのだ。

これは私が続けてきた医療現場でのフィールドワーク、及び医療福祉系大学で医療者と5年にわたり関わった実感とも通ずるものがある。「患者中心の医療」「患者さんらしさ」「その人らしさを引き出す」とかれらが口にする時、そこには医療が医療者主導で行われ、患者さんの「その人らしさ」を奪ってきたという反省があった。だからこそ、かれらが「患者さんらしさ」を口にする時、そこにはこれまで見てきた新聞記事同様に、かれらにとっての理想とする支援のあり方、つまり理想の問題の解決のあり方が見出されている。

2.0 自分らしさに漂流する

とはいえ、である。

「自分らしさ」とは一体何のことを指すのだろうか？ 私たちは何をしていたら自分らしく、何していなかったらそうでないのだろうか。Googleで「自分らしさ」がテキストに含まれるページを調べてみると、全部で932万件という天文学的な数が検出される。タイトルに「自分らしさ」が含まれるページだけに絞ると5万6600件となり、こちらもかなりの数である。

それではネット内においてこれはどういう言葉として定義されているのか。Googleには強調スニペットという機能があり、検索語を入れると、その言葉の定義などがトップに表示される仕様になっている。「自分らしさ」のそれは次のようだ。

自分らしさとは自分の価値観を大切にして、自然体で言動が行えることです。「らしさ」はそれ自体の特徴がよくわかる状態。それに自分がつくので、自分らしさとは自分の特徴がよく現れている状態とも言えるでしょう。自分らしさに似た類語

として、個性・持ち味・キャラクター・独自性などがあります。

(2021年4月30日時点)

これはいつけんわかるようで、実際は何も解説をしていない。昨今^⑦ヒ判の対象にはなるものの、例えば女らしさ、男らしさといった言葉には、メイクをしているとか、家事をするとか、泣かないとか、あるいは力が強いとかいったように、その「らしさ」を体现するための具体的な行動がそれぞれ存在する。他方「自分らしさ」はそうではない。自然体や自分の特徴が自分らしさと言われても、それは内容を説明したのではなく「自分らしさ」をトートロジー（類語反復）で説明しているだけである。

加えて、「猫らしい」と口にするためには、猫がどんな生物かを知っていないと始まらないように、「自分らしさ」を語るためには、自分が何かを知っていないてはならない。しかし、これはすこぶる **B** な問いである。何をしていたら自分、何をしていたら自分ではないのか。いや、何をしていようと、自分は自分ではないのか。もしかしたら「自分」などないのではないか。このように考え出したらきりが無い。

実際、「自分らしさ」とともに検索される言葉を調べると、「自分らしさ」への人々の **C** が窺える。なぜならそこで検索される上位3位は、「診断」「例」「わからない」であるからだ。932万件という膨大な「自分らしさ」の中で、「自分らしさ」に溺れる人が続出している。

「自分らしさ」をありとあらゆる問題の解決策に据えた平成は、「自分らしさ」とは何かという肝心な問いの答えを置き去りにしたまま終わりを迎えた。しかしいまだに人々は、「自分らしさ」への希望を捨ててはいない。

3.0 **D** への抵抗としての「自分らしさ」

2020年1月1日から12月31日にかけて出された新聞記事を見てみよう。朝日新聞のデータベースである「聞蔵Ⅱ」を用い、「自分らしさ」「自分らしい」「自分らしく」がタイトル、及び本文に含まれる記事を検索すると、399件のヒットがあった。

その上で、先の3つの言葉の中で最も頻度の多い「自分らしく」が含まれる205の記事を内容において類別すると、「ジェン

ダー」「老い」「病氣・障害」「スポーツ（課外活動・囲碁、将棋含む）」「若者」「働き方」「ファッション」「共生社会」「カルチャー（イベント・書籍・映画などの紹介）」「その他」の9カテゴリが見出された。

それではこれらの記事において「自分らしさ」はどのような意味で使われているのか。まず明確なのは「自分らしさ」が、
D への抵抗を指していることである。例えば1月7日にはジェンダーに関する次のふたつの記事が掲載される。

ひとつは自分のことを「俺」と試しに呼ぶようにしたら、男子が自分を対等に扱うようになったという女子高校生の投稿。もうひとつは交通事故で瀕死^{ひんし}の重傷を負ったことをきっかけに、女性として生きることを決めた赤坂マリアさんへのインタビューである。女子高校生、及び赤坂さんにとって、それぞれが選んだ生き方は「自分らしい」ものであり、ふたつの記事はともにもうあることの大切さを説く。

同時期発刊の『週刊朝日』（1／3～1／10新春合併号）では、考古学者の吉村作治氏が、「どうせ死ぬなら、自分らしく、悔いなく逝こうぜ！」という精神を体现するひとりとして紹介される。彼が特集された理由のひとつは、彼がエジプトにすでに墓を購入しており、死後はそこに土葬されることが決まっているからだ。火葬を見て、自分はあのように焼かれたくないと思ったことが土葬を選んだ理由である。つまり吉村氏は、火葬という日本の当たり前前に逆らって土葬を決意したゆえに「自分らしい」。「当然こうすべき」「ふつうはこうだろう」という考えに抗^{あらが}うことで自分らしさ、その人らしさが体现されるといった考え方は、老い、病氣・障害関係の記事にも共通して見られる。

病院死が多い現代日本において在宅死を目指すことは「自分らしい」。ALS（筋萎縮性側索硬化症）や認知症、がんといった病気になるっても、やりたいことを諦める必要はない。工夫次第で、やりたいことを実現させることは可能であり、そのような生き方をしている人は「自分らしい」。こういった論調の記事が1年にわたって続く。

D あるいは世間の当たり前前に逆らって自分の望みを実現する・表明するといった意味の「自分らしさ」は、結果興味深いところまで拡張される。例えば1月22日には、弁護士を裏切^⑤って逃亡したカルロス・ゴーンの生き方が「自分らしい」と表現され、2月2日には、スイスの村で定期的に鳴る鐘の音をソウ音^⑥であると訴えた女性が自身の行動を「自分らしい」と形容

するコメントが掲載される。11月5日には形が丸ではない「規格外パール」と呼ばれるパールを選ぶことが自分らしさであるとの記事が掲載された。

4.0 内発的な選択と動機？

これらの記事を踏まえると「自分らしく」あるためには次のふたつが必要であることが見えてくる。

①大勢がそのようなものとして疑わないことに対して抵抗すること。「抵抗」が大袈裟おおげさであれば、少なくとも大勢とは違う道を選択すること。

②①においてなされた選択は、他者からの強制ではなく、何者にも依存しない、ジュン粹オに内発的な動機からなされていること。つまり、「他ならぬ『私』がこれをしたい」という意思のもとにその選択がなされていること。

先のネットの定義に従えば、②のジュン粹に内発的な動機とそれに準じた行動さえ確保されていれば、①の抵抗はいらないとも言えるだろう。しかし記事を見る限り、歯を磨く、コンビニでパンを買う、お風呂に入るといったことを「自分らしい」と表現している記事はない。皆が行うありふれた行為が何者にも依存しないジュン粹に内発的な動機で仮になされていたとしても、それが「自分らしい」と形容されることはないのである。それを踏まえると何かが殊更に「自分らしさ」として取り上げられる時、そこには①と②の双方が含まれていることが少なくともこれら記事からは結論づけられる。

しかし、ある動機が自分の内面のみから生じ、それに即する選択が外的要因の影響なくしてなされることなどあるのだろうか。例えば先に紹介した吉村氏は、火葬を見て、自分もあなるのは熱そうで嫌だと考えたという。その結果、彼はエジプトで土葬されることを選ぶのであるが、これは「自分らしい」というより「エジプトらしい」とも言えるのではないか。

それとも「自分らしさ」とは、自分とは異なる人々によって用意された複数の選択肢を前に、

D

や世間の常識に

惑わされることなく、自分の内側から生じる気持ちのみに従って選択することなのだろうか？　それができた時、たとえばそれが外側から見て「エジプトらしい」選択だったとしても、それら選択は、その動機の出どころに照らし合わせて「自分らしい」ということになるのだろうか。

しかし、自分のうちのみからジュン粹に立ち上がってくる気持ちがあったとしても、その気持ちが眼前に用意された選択肢とピッタリ合うことなど果たしてありうるのか。在宅死という選択肢や、俺という呼称、スカートのような衣装、このようなものが存在する以前に、このような死に方、呼称、衣装を望むことなどまず不可能であろう。

^F提示された選択肢とその中のひとつを選び出す決断というのは、「物言わずに選ばれることを待つ選択肢」（客体）と「内なる意思」（主体）といった形で、ふたつに分断することなどできない。これらふたつは、それぞれが混じり合って互いを作っているといったほうが適切だ。ただ、このように考えると「自分」の所在は当然ながら曖昧になってしまう。だとすれば、「自分らしさ」を可能にしているのは何なのか。

5.0 社会の承認を必要とする「自分らしさ」

先の問いに答える前に、「自分らしさ」のもうひとつの奇妙さを押さえておこう。それは、ある選択や行動が「自分らしい」と認められるためには、その選択や行動に社会的承認が伴う必要があるという点である。これは奇妙な G だ。自分らしさには大勢の意見への抵抗が伴う一方で、それは同時に社会に認められなければならないというのだから。

しかしこのことは、犯罪を考えればすぐわかる。殺人事件を起こした人に、外界の影響を受けないジュン粹な意思なるものがあつたでしょう。そしてその犯人の意思が「その殺人を完遂すること」であり、犯人がその行為を「自分らしい」と語ったとしても、社会は当然ながらそれを「自分らしさ」の実現とは認めないはずだ。

同じように、安楽死を望む人がそれを決行して亡くなった場合、本人の意思表示が明確になされ、かつそれが合法的に行われたとしても、それが「自分らしい」（その人らしい）と呼ばれうるかは、議論の余地が残る。なぜなら社会の D が安

楽死を選択させたに過ぎないと、それを周りで容認した人々がまとめて糾弾されることもあるからだ。これは自殺に関しても同様で、自分にとって自殺は「自分らしい」といくら本人が訴えても、それを「自分らしい生き方・死に方」として社会が推奨することはありえない。

H 1

「自分らしさ」はその定義とは裏腹に、社会の承認を必要とする。

H 2

社会に認められて初めて「自

分らしさ」が成立するのであれば、それはそもそも「自分らしさ」なのだろうか。周囲の人間の納得も踏まえた上での自己実現であれば、それは「自分らしさ」ではなく合意であろう。

H 3

「自分らしさ」とは、その響きとは裏腹に、ある種の

合意の形式そのものを指しているのではないだろうか。

問 1 傍線部 A について、著者の意図にあてはまるものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

14

① 国は、国民一人一人の「自分らしさ」の実現を施策目標に掲げている

② 行政は、公的文書に使えるように「自分らしさ」の定義を厳格に行った

③ 国は、「自分らしさ」の重要性についての理解が進むよう啓蒙活動を推進してきた

④ 国は「自分らしさ」という言葉を公文書に用いることで普及に努めてきた

⑤ 国の公的な文書で使用されるほど「自分らしさ」という言葉が世間に浸透している

問 2 空欄 B にあてはまるものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

15

① 象徴的

② 即物的

③ 修辭的

④ 数学的

⑤ 哲学的

問3 空欄Cにあてはまるものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

16

① 真剣さ

② 悲しみ

③ 戸惑い

④ 好奇心

⑤ 期待

問4 空欄Dにあてはまるものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

17

① 規範

② 組織

③ 権力

④ 法律

⑤ 同輩

問5 傍線部Eの例としてあてはまるものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

18

① 欲しいスカートのデザイン画を自分で描き、それに基づき洋装店でオーダーして仕立ててもらう

② 欲しいスカートを自分でデザインし、ある店舗でそのデザインと完全に一致する商品を偶然発見する

③ 「俺」という呼称を使っている女性がいることをネットで見かけ、自分もその真似をする

④ 「俺」という呼称は男性が使うものだと思っていたが、自分が使ってもおかしくはないと考えようになる

⑤ 書籍で「在宅死」という選択肢があることを知り、そのような死に方をしてみたいと考えるようになる

問6 傍線部Fはということか。最も適切なものを次から選べ。

19

- ① 自分の意見を前面に出しすぎると、「自分らしい」意思決定は困難になる
- ② 「自分らしい」選択は、世の中において一つだけではない
- ③ 「自分らしい」選択は、世の中にある選択肢の影響を受けながら生じる
- ④ 世の中の選択肢を知りすぎない方が、「自分らしい」選択につながる
- ⑤ 世の中の人の意見をよく聞かなければ、「自分らしい」選択はできない

問7 空欄Gにあてはまるものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

20

- ① パラドックス
- ② トリック
- ③ カード
- ④ サプライズ
- ⑤ プライド

問8 空欄H1からH3には、次のイからハの語句が入る。その順番として、最も適切なものを次から選べ。

21

イ かし

ロ 実は

ハ このように

H1 H2 H3

① イーロハ

② イーハロ

③ ローハイ

④ ハーロイ

⑤ ハーイロ

問9 著者の考えと合致するものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

22

① 現代日本で「自分らしい」死に方をするために周囲の納得が必要なことが、その実現を極めて困難なものにしているのではないか

② 現代日本で死のあり方を決定しているのは社会からの承認ではなく、患者にとっての「自分らしさ」なのではないか

③ 本人の意向に対して周囲の人間の抵抗の意思が明らかに示されている場合にのみ、真の意味で「自分らしい」死に方の形式といえるのではないか

④ 病気や死をめぐる局面で使われる「自分らしさ」という言葉は、本人と周囲の人たちとのある種の合意の形式を指すのではないか

⑤ 現代日本で「自分らしさ」は最大限に尊重されているといえるが、それは周囲からの抵抗があつたからこそ実現できたものなのではないか

問10 文中の二重傍線部⑦から⑩のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを次から選べ。

23

⑦ タン^ア的

① タン^ア発の仕事

② クラスのタン^ア任

③ タン^ア物が並んだ呉服店

④ タン^ア正な姿

⑤ 大タン^アな行動

24

⑧ チュウ^イ出

① チュウ^イ途半端な仕事

② 君主にチュウ^イ実な家来

③ 的をチュウ^イ視する

④ チュウ^イ選に外れる

⑤ 宇チュウ^イの果て

25

⑨ ヒ判^ウ

① 文芸ヒ^ウ評

② 大規模な豪雨ヒ^ウ害

③ 論理のヒ^ウ躍

④ ヒ^ウ痛な面持ち

⑤ ヒ^ウ力な子犬

26

⑩ ソウ^エ音

① ソウ^エ朝の雷雨

② ソウ^エ造性の向上

③ 砂漠などの乾ソウ^エ地帯

④ 厄介なソウ^エ動

⑤ 高ソウ^エ建築

27

⑪ ジュン^オ粹

① 交通安全ジュン^オ間

② ジュン^オ調な仕上がり

③ ジュン^オ視船の航行

④ 湿ジュン^オな気候

⑤ 不ジュン^オな動機